

序

——なんのために生きるのか。

その答えが出せないでいる。命を救う術を知り、傷つく相手をいれば助けてやりたいと思う。けれど同時にそれになんの意味があるのだろうかとも思う。

ただただ彼ら——《欠けたもの》の苦しみを長引かせているだけなのではないか。一時の幸福が訪れたとしても、自分が見届けてきた彼らは皆、不幸な結末を迎えた。国に、瘧^{あざ}に、そして時には《華弁^{ラ ヴ ァ ル}持ち》に急き立てられて戦場で散るものばかりを見てきた。助けた先からこぼれ落ちていく命がひどく虚しい。しかし手を伸ばし続けてしまうのだ。

「どうか」と願われた言葉がある。遠い昔、

自分もいつかはそう願えるようになって思っていた。けれど彼の人に願われた時、すでにかつてのような純真な心でそれを願えなかった。それでも意地のようにその言葉にすがって歩いている。

全身に広がる痣をそつと撫^なでる。

若かりし頃、それは恐怖そのものだった。昨日よりも今日、今日よりも明日に痣が広がっていないかと考えるだけで怖かった。、身が震えた。毎朝目覚めるやいなや自分の体を確認し、痣を確かめた。今日は広がっていない——ああ、まだ死は遠いのだと安堵^{あんど}の息をついた。

けれどあの日——地獄から逃げてきた日から、何もかもが分からなくなった。

自分が生きている意味。《欠けたもの》が生きている意味。《欠けたもの》として生き延びる意味が。

かつてはあれほど恐れた死が、今では心のどこかで待ち望んでいるのではないかと、思うことがあった。

大したこともできずに、恥ずかしげもなく生

き延び、隠れ潜む自分が浅ましくてたまらない。けれど再びなにかに従属する気にはなれなかった。託された想いを思えば、きっと然るべき施設に属した方が、叶えられる可能性はずっと高いだろう。金も《蜜》も潤沢に与えられ、ただひたすらに願いのために邁進できる。もしかしたら、狂わずに求めるものを掴んだその先で、終われるかもしれない。

——だが。

結局は怖いのだ。自分の本当の望みを白日の下に晒すことが。

生きることが辛い。けれど死ぬことは罪深い。幸せを感じるものが恐ろしい。それはいつかは失われてしまうものだから。死ぬことは恐ろしい。けれどその先に安息があるのならば——。

絡まり合った感情の糸があまりに複雑で、もう自分ではどうすることもできなかった。時折ふと思い出したように解こうと手を伸ばすが、大抵はさらに複雑に絡み合うだけだった。けれどそれも、もうすぐ終わる。そんな予感がある。

絡まった感情をそのままに、いつか耐えきれずに崩れ落ち、消えてなくなるのだろう。

それが恐ろしく、そしてどこか待ち遠しい気もした。

護衛

馬の背に揺られる。ジンは心地よい一定のリズムに身を預け、荷馬車の隣を並走する。初めは手綱の扱いにも不安があったが、幸い運動神経に恵まれていたために、少し練習するだけでどうにか形になった。ジンを乗せるこの馬は癖が少なく、呼吸も合った。時折バランスを崩しかけても、魔法でそっと風を起こし、誰にも気づかれぬよう姿勢を整える。唯一ジンを背に乗せた馬だけが、不審そうに視線を送ってくる。

馬車は一両が通れるほどに整備された街道を、淡い軋^{きし}みを立てながらまっすぐ進んでいた。頻繁に使われる道なのか、車輪は穏やかに回り、荷が崩れる心配も少ない。だが気になるのは、道端の茂みに潜む魔獣や、岩陰に潜む盗賊の影

だ。無防備な旅路で襲われでもすれば、ひとたまりもない。

とはいえ今は、見通しの良い草原のただ中を進んでいる。気づかぬうちに忍び寄られる心配は薄いだろう。だからこそ、常に神経を張り詰めるのは心をすり減らすだけだ。適度に力を抜きながら、ジンは街道の果て、空に溶ける地平線を静かな期待とともに見つめていた。



レオンの^{おきななじみ}幼馴染を追うと決めてから、まずは「どうやって探すのか」を詰めなければならなかった。幼馴染が最後に確認されたのは、山を越えた先にあるメルクアトルと呼ばれる国だという。

その情報はレオンが冒険者ギルドを通じて得たものだった。その情報というのも、互いに相手の様子を知りたいと考えた際に、ギルドで金を払って照会すれば引き出せる程度のものだ。照会サービスは主にグループを組んだり、取引

先とのやり取りで使われるらしい。一度仕事を共にした相手に再び連絡を取るために——通常の手紙より早いこともある——、このサービスを使って情報交換することも多いそうだ。

レオンと幼馴染は喧嘩^{けんか}別れに誓ったために、手紙ではなく照会で互いの現状を把握していたという。しかしあるとき、ぷつりと情報が途絶えた。消息不明になったわけではなく、幼馴染が自分への照会に応じないようギルド側に要請したということだった。メルクアトルにいたというのも、随分と古い情報のようだ。

死んでいるわけではないだろうが、どこにいるのかは分からない。幼馴染からこちらに連絡がいつ来てもいいよう、レオンは頻繁にギルドに情報を置いているというが、幼馴染がそれを受け取った形跡はないらしい。

《^{ラ ヴ ァ ル}華弁持ち》であるジンがいるという情報も、二人の間で通じるような表現で送ったが、受け取った様子はないという。

「ただ意地になって見ていないだけなら良いんだが……」

苦く笑ったレオンの顔には、心配の色が透けていた。

ふたりで話し合った結果、幼馴染が最後に訪れた情報が残る国へ行こうということになった。それがメルクアトルだった。

そこはレオンの家がある国——今更になって知ったのだが「クレイドナ」というらしい——よりも《欠けたもの^リの^レ》の地位が高い国だという。

国に従属させられることは変わらない。だが、クレイドナにとって《欠けたもの》が優秀だが、いつ爆発するか分からぬ危険物だとしたら、メルクアトルにとっては、無視できぬ欠点があるが有用で価値の高い財だった。主導権は決して渡さないが、程よく手綱を握り有効に活用する。近隣から逃げ込む《欠けたもの》もそれなりに居るという。

《欠けたもの》であるレオンの幼馴染が向かったのも得心がいく。まだそこにいるかは分からないが、十分に行く価値があった。

しかし目的は決まったものの、先立つものがない。旅をするには金がいる。それならばと受

けたのが、護衛の依頼だった。

運良くクレイドナからメルクアトルまで荷を運ぶ商会の護衛につくことができた。商会は中堅らしく、見た目以上に物を収められる魔法具——魔法袋——をいくつか所持しているが、それらは主に貴金属の収納に使われ、大きな品は馬車の後ろにくくりつけられていた。

魔法袋といっても容量は無限というわけではないらしく、より多く、より重いものを入れるには複雑な工程が必要で、少し性能が良くなるだけで何倍にも値段が跳ね上げあるらしい。

そして、魔法袋に入れても重さがなくなるわけではない。入れれば入れるほど重くなるのだ。持ち運ぶにも魔法が必要になり、性能が良いからといって使い所は難しいのだという。そんな理由で、この商会では魔法袋はあまり使っていなかった。

商会の者は馬車で、護衛のジンたちは馬を与えられて左右を守るように走る。その後ろにジンたちとは別に雇われたソロの冒険者が付く。

合計三人の護衛だ。多いのか少ないのかはジ

ンには判断がつかないが、レオン^{いわ}曰くこの規模の商会が山を越えるのであれば妥当な人数だという。

日が落ちる間際、村に着いた。

先触れとして「商会が着くまで閉門まで待て」と伝言を運んだレオンと合流し、そのまま村へ入る。馬車が門の内に収まると、軋む音を立てながら門扉が閉まった。

「ここは魔獣が多いようだな」

隣にやって来たレオンがちらりと門を見ながら、ジンにだけ聞こえるような声^{ささや}で囁いた。

なるほど確かに今までの村には、これほど立派な門はなかった。厚く重い扉が必要なほど、ここは警戒の必要があるのだろう。

前を向くとそびえ立つような山が重厚に座していた。日もほとんど落ちかけた中、黒々^{くろぐろ}と影の中に沈みある種の凄みを感じた。あそこから魔獣が降りてくるのかもしれない。

ジンたちは友好的に迎えられた。都市と離れた村では、馬を出して遠くの町まで買いに出るか、外から訪れる商人から手に入れるしかない。

そのため^{さまざま}様々な商品を運んでくる商人は喜ばれるのだ。

近くの人の顔さえ曖昧となった暗さの中、村人たちが遠巻きに顔を^{のぞ}覗かせているのが分かった。扉を開けて馬車を見ているのだろう、家々^{いえいえ}から漏れる明かりが人々^{ひとびと}の影を長く揺らしている。

村の唯一だという宿へ案内される。馬車の荷台は屋根付きの使われていない厩舎^{きゅうしゃ}に置かせてもらえることになった。高価なものは宿へ運び込むが、それ以外のものは防犯の術を仕掛けて置いておく。番犬として犬を一匹残して終了だ。

はじめはジンも不用心ではないかと驚いたのだが、この商人が使っている防犯の術はそれなりに値の張るもので、もしも物を盗んだ場合は相手の顔に真っ赤な入れ墨のようなものが入るのだという。術の核となる指輪を持つものでないとそれを解くことができない。もちろん高位の術者ならば破ることができるが、それほどの使い手がわざわざ盗みたくなるようなものは積

んでいないし、あったとしてもそれは手元に置く、ということらしい。

ジンとしては夜通し馬車を見張るより、ベッドで眠れる方がずっとありがたい。文句などあるはずもない。

それにしても魔法というものは、つくづく便利だ。

それなりの夕食を頂いて、割り当てられた部屋に入る。もちろんレオンと同室だ。

他の村ではレオン以外の護衛たちと同じ部屋に詰め込まれることもあったのだが、この村はそれなりに裕福らしい。

ぐっと体を伸ばすと関節の合間に鈍く重い。野宿も何度かやった末の今だから、たとえ薄くても布団の上で眠れるのはありがたかった。

ジンとレオンはベッドに腰掛けて向き合った。「明日はここで商いをするらしい。明後日には山に入ることになるだろう」

「ん？ 前は迂回^{うかい}すると言ってなかったか？」

「いや、それは山頂までは登らないというだけだ。大きく山の周りを行くよりも、多少面倒で

も登ったほうが道があって短い時間で行ける」

レオンが商人に渡された地図を広げ、指で道順をなぞった。地図にはこの辺りの土地の名前と山が書かれ、いくつかの色の線が引かれている。ルートだろう。レオンが指すのは黄色の線だ。

「……暗くてよく見えなかったが、それなりに険しい山だったと思うが」

本当に登るのか？ と嫌そうな顔をするジンに、レオンは苦笑して肩をすくめた。

「山裾を回っていくと二倍はかかるらしい。そろそろ寒くなってきた。雪が降る前にあちらへ着きたいのだろう」

魔獣もそれなりに出るらしいから、金も弾んでくれるらしい。そうレオンは笑った。

レオンの許容の姿勢に、ジンはそういうものかと^{うなず}頷いた。彼がそう言うのであれば、ジンは受け入れるしかない。護衛の仕事は主にレオンの実績を買われた形で入ったからだ。ジンも道中何度か魔獣を蹴散らしはしたが、不慣れなせいで動きが拙い。その点、レオンはジンという

お荷物がいてもなお十分以上の働きをしていた。

もうひとりの冒険者——名をローランと名乗った——もまた手練れのように、ジンとしてはなかなか中々に肩身が狭い。ローランはジンたちよりも一回りは上の歳で眼光鋭く、寡黙な歴戦の戦士という空気を醸して、実際、からださば体捌きは玄人のそれだった。仕事に慣れないジンにも、彼は口数は少ないながらも手を貸してくれる。商会とは長い付き合いらしく、実質彼がトップで、その下にレオン、さらに下にジンというようなヒエラルキーになっていた。

話しておくべきことが終わると、レオンはそわそわと肩を揺らした。何を気にしているのかすぐに分かり、腰を浮かして彼との距離を詰める。ベッドの上に載せていた地図は踏み潰さないようにと隅に避けた。

「……ジン」

もう幾度も繰り返しているというのに、未だ体を固くするレオンに少しだけ喉を鳴らす。戸惑いと期待が混じり合った瞳が、ジンを見た。

その視線に答えるように、そっと彼の唇に自

分のものを重ねる。促すように下で唇を撫^なでると、おずおずとレオンの口が開いた。驚かせないようゆっくりと舌を入れ、レオンの口の中をかき回す。

「んっ」

すぐに赤く染まったレオンの目元を見ながら、自分の唾液をレオンの口に押し出すように流し込む。レオンはこくりと飲んだ。

それを幾度か繰り返すと、はじめはぎこちなかったレオンの舌が拙く、しかし滑らかに動き出した。

「ん、はっ」

レオンは恍惚^{こうこつ}に頬を染めながらジンの舌をすすった。いつの間にか、逃さないとももいうように両手でジンの腕^{つか}を掴まれていた。

熱い息遣いと水音が部屋に響く。レオンの熱い舌がジンの口内を縦横無尽に動き回る。

ジンもはじめのうちは、気恥ずかしさを覚えたが、今はどこか、大きな犬に口の中を舐^なめ回されているような気さえしてくる。技巧も作法もなく、ただ求めるままに《蜜》^{ネクト}をすすられる。

昼間は冬の凛々^{りり}しく獅子^{しし}のような精悍^{せいかん}さを感じる瞳が、いまやとろりと溶けている。溶普段は見せない柔らかな顔で唇を吸ってくる。しかし彼は^{しつけ}馴^なれない獣ではなく、こちらの意図^くを汲み取って、上手に加減もする。……そうできるようになった。

そろそろ良いだろう。握られている腕をゆらゆらと揺らし、拘束を外す。ジンが後ろに体を引くと、そのまま追ってくるレオンの頭をゆっくりと撫でた。何度か繰り返すうちに、いつの間にか決まった終わりの合図だった。

口を離し、額をくっつけたままじっとレオンの瞳を覗き込む。レオンは名残惜しそうにジンの口を目で追っていたが、しばらくすると瞳にゆっくりと理性の光が戻ってきた。

「っ！」

彼は我に返ると、ざっと音を立てるように顔を真っ赤にして身を引いた。勢いが良すぎてベッドから落ちそうになる。

「おっと」

「す、すまない……！」

とっさにジンが肘を掴んで止めると、レオンはわたわたと手を振った。腰を浮かしたままどうすればよいのか分からないというように数度息を吸うと、ゆっくりとベッドに腰を下ろす。

「……すまない」

「もう大丈夫か？」

ジンはおかしい挙動には触れず、《蜜》は足りたかと確認すると、レオンは頬を朱に染めたままこくりと頷いた。

「しばらくしていなかったものだから……」

レオンの言葉はそこで途切れたが、なにが言いたいのかは分かる。

久しぶりの《蜜》で、思った以上に我を忘れてしまったのだろう。

確かに護衛として商人に付いてからは、ほとんど二人きりになる機会がなかった。あってもほんの一時で短いやりとりで終わってしまう。ジンとしてもレオンの発作は気になる。できればそれなりの頻度で《蜜》を渡しておきたかった。

《蜜》は、ジンからレオンに支払うべき対価

でもある。少しでもと思い、寝る際などに周りに気づかれぬよう手を握ったりもしたのだが、やはり直接得られるのは格別らしい。

ジンがぽんぽんと背を叩くと、ようやくレオンはすぼめていた肩を普通に戻した。わずかに頬に色を残しながら微笑む。

「もう大丈夫だ」

「うん」

ジンも同じく笑うと、二言三言言葉を交わした。

そうして、ふたりは早々に寝ることにし、ベッドに潜り込んだ。

横になると同時に、ずっしりと体が重くなる。今日は一日ほとんどが馬の上だった。思いの外、疲れているのだろう。このまま意識を手放したいが、上に掛けるものが薄く肌寒い。

眠られないことはないが、もう少し暖かくしたい。だが起きるのも億劫だ。どうしたものかと体を丸めて思案していると、レオンがむくりと起きたのが分かる。潜めた声で問いかけられる。

「寒いのか？」

「ちょっとな」

ジンも同じく囁くように答えた。眠気のせいで言葉の輪郭が丸くなる。

荷物を漁れば厚手のローブがあるだろうが、一度横になったのにまた起きるのは面倒だった。

しかし風邪を引くわけにもいかない。そんなことを考えながら、うつらうつらしていると、隣からずるずるとなにかを引きずる音がした。いったい何か、とぼんやりしているうちにジンの背中をなにか温かなものが包んだ。

気づけば離れていたベッドが繋^{つな}がっていて、レオンの腕がジンの腹に回されていた。

くると体を反転させるとレオンの顔が目の前にある。

「こうすれば寒くないだろう？」

そう囁く声は照れを含んでいて、明かりがあればその表情を見てやるのに、と少し残念に思う。まぶたが重い。レオンの熱がジンに移り、ますます強い眠気が襲ってきた。難しいことはもう考えられなかった。

ジンはふふ、と睡気を大きく含んだ吐息を漏らし、いつものようにレオンの手に自分のそれを絡めた。驚いたようにびくりと揺れ、次いで大切なものを離さないように強く絡まったような気がするが、確かめる前にジンの意識は途絶えた。

まぶた

瞼は完全に閉じ、夢の世界へ落ちていく。

翌朝目が覚めると、ジンの肩口に額を押し付けるようにしてレオンが眠っていた。片手がかっちりと握られている。ぱちりぱちりと瞬いて、ゆっくりと夜のやり取りを思い出した。毛布に包まれない頬にはひりひりとした冷たさを感じるが、レオンに触れているおかげで寒くない。

彼の後頭部をしばらく見つめて、自由な片手で髪をかき混ぜるように撫でる。レオンはうなりごえ唸り声のようなものを上げると、ぐりぐりと肩に頭を擦り付けた。彼は朝は弱くはないはずだ。どちらかというとなジンの方が寝坊することが多い。休日など、ぐずぐずとベッドから出ないこともある。レオンはそんなジンを呼びに来る役

回りだった。

それなのにこうなのは、やはり疲れが溜^たまっていたのだろう。

ちらりと窓に目をやると、まだ時間はありそうだ。ジンはレオンを起こさないようにそっとベッドから抜け出すと、彼が寒くないように荷物の中から彼の厚手のローブを上^うに掛けてやった。そして自分もローブに身を包むと外に出る。

つんと刺すような冷気がジンを襲った。風が吹いているわけでもないのに、底から冷えるような寒さが骨に染みる。薄い霧が漂い、そびえ立つ山は雲とも霧ともつかない白に沈んでいた。

明日はあれに登らなければならない。特別にしゅんけん峻険には見えないが、山の機嫌は読めない。要領よく進めればいいのだが。そう思いながら井戸から水を汲んで顔を洗う。空気の冷たさに反して井戸水は柔らかく、二度三度と頬をくぐらせるうちに、ほどよく眠気が飛んでいた。

「おはようございます！」

宿の方から足音がしたかと思うと、一直線に誰かがジンの方に向かってきてぴたりと足を止

めたのが分かった。少し高めの、その歳特有の
声で挨拶をされる。その足音の軽さと、気配で
振り向かなくとも誰だか分かる。

「ああ、おはよう」

ジンが挨拶を返しただけで、その少年は^{うれ}嬉し
そうに頬を染めた。

彼は商人のひとり息子で、この旅でなぜだか
ジンに懐いた人間だった。ジンはあまり護衛と
して貢献は出来ていなかったが、その分この少
年——クリスの子守、あるいはご機嫌とりとい
う点では役に立っていた。

正確な年齢は聞いていないが十四、五歳くら
いだろう。少年から青年に変わる間際の一種の
^{もろ}脆さをそこはかたく感じる。クリス自体は人
懐こく、さすが商人の息子と言いたくなるほど
人当たりがいい。そして、おしゃべりだ。
^{しょうしょう}少々甘やかされて育ったのか年齢の割に子ど
もっぽい、多少面倒になっても不快になるほ
どではない。

クリスはなぜだかジンを気に入ったらしく、
少しでも休憩に入るとまるで子犬のようにジン

に突撃してくる。そのせいもあってなかなかレオンと二人きりになれなかったが、彼を恨むのも筋違いだろう。

ジンが井戸の場所を譲るようにどくと、「そこで待っていてくださいねっ」と念を押して、クリスは慌ただしく顔を洗った。勢いよく水を顔に叩きつけ、ぼたぼたと水滴が落ちるのにも構わずに顔を上げると、ぞんざいにタオルで拭う。

寝癖の付いたままの髪に、さらに水をかぶったことで癖をつけている様子に、ジンは苦笑して直してやろうと手を伸ばす。しかし。

「——ジン」

クリスの髪に手が触れる前に、後ろから声を掛けられた。

振り返ると、なぜか不機嫌そうなレオンがいる。

「レオン、おはよう」

寝起きのせいで機嫌が悪いのだろうかと内心首を傾げながら挨拶すると、レオンは少しだけ表情を柔らかくし「おはよう」と返す。クリス

もぺこりと頭を下げる。

と、宿の方からクリスを呼ぶ声がした。クリスは名残惜しそうにジンを見ると、後ろ髪を引かれるようにして呼ばれた方に歩き出した。

「また後で！」と叫んで手を振ってくるが、そうしている内にまた名を呼ばれて慌てて走っていった。

その若々しい騒がしさ^{わかわか}に目を細め、ジンは薄く笑った。そんなジンを、なぜかレオンがもどかしげに見つめている。どうしたのかと問うと、レオンはぐっと言葉を詰まらせ、小さく溜息^{ためいき}を吐いた。左右に視線をさまよわせたかと思うと、ぼそりと言う。

「……起こしてくれればよかっただろう」

そうして無然^{ぶぜん}とした顔をするので、ジンは場違いにも微笑んでしまいそうになる。「気持ちよさそうに眠っていたから、そのまま寝かせてやろうかと」と謝りながら、いつもよりもずっと幼い顔をするレオンを気づかれない程度に眺める。

この頃、彼はこんな風に年相応の顔を見せる

ようになった。以前は年の割には円熟した印象だったが、それはある意味壁があったかららしい。互いに人には言えない相手の秘密を開いたからか、あるいは今はジンに慣れてきたからか。それとも、そのどちらもか。

彼は対外的にはいつも通り、年下にも年上にも好かれそうな堅実な余裕のある男だ。それがジンの前では表情を崩して感情を表現してくる。

なにとはともあれ、こうやって素の姿を見せてくれるのは素直に嬉しい。

ばしゃばしゃと荒く顔を洗うレオンにタオルを渡す。むっつり黙ったままのレオンの髪が、クリスと同じように跳ねているのを見て、ジンは手を伸ばした。

今度は誰に止められることもなかった。頑固に曲がる髪に水を落とし、指先で癖をほどいて整えてやる。

レオンの顔をちらりと見ると、いつの間にか不機嫌が直ったのか、わずかに照れを^{にじ}滲ませ、大人しくジンにされるがままになっていた。

可もなく不可もない朝食を食べ、ジンたちは村に出る。商人たちは商いをするというので、村の中央で別れる。いつもならばその横で簡易な店を開く手伝いなどもするが、今日は山越えのために情報を集めたほうが良いだろうということで、護衛のローランを残しジンたちは放流されたのだ。

湿気を多く含んだ霧はすでに晴れている。空気には冬の訪れを感じさせる鋭さがあるが、まだしばらくは雪は降るようには思えない。しかし山の天気はよく変わるという。山裾のこの村もまた、予想していない時期に不意に雪が訪れることがあるのだろうか。

村人たちは概ね友好的に接してくれる。だが、ジンたちの見慣れぬ顔が珍しいようだ。昨日の夜に商会の荷馬車が村についたことはすでに皆知っているらしく、「護衛のひと？」と村人たちから近づいてきて、有益な情報からこの後いったいどこで使えるのかというようなローカルなものまで教えてくれる。

その中でひとつ、気になる話があった。

「——医者？」

「ああそうだ。オレたちは『先生』って呼んでいるがね」

村人のひとりが話すのは、山で暮らす特異な医者のことだ。山に自生する薬草などを使って薬を作り、それを村に下ろしにやってくるという。それだけならばただの薬師のように思えるが、村の若者が魔獣に襲われて深く腕を^{えぐ}抉られた際に、たまたま村に滞在していたその男が治療をしたというから、医術もかじっているようだ。

都市から離れた土地に医者の存在は貴重だ。村人たちもはじめは不便な山よりも村にと熱心に勧めたらしいが、その医者はのらりくらりと^{かわ}躲した後、さっさと山に帰ってしまったという。

しかし医者は山まで呼びに行けば下りてきてくれるため、村人もしつこく言ってどこかに去られるよりは、もう誰も勧誘はしないとか。

「もうあの人が居着いて二、三年になるかなあ」

感慨深そうに言ったのは、四十ほどの男だ。

「あれだけ腕が立つんだ、いったいどこから逃げてきた人だろうって噂^{うわさ}になったんだよ。オレたちもどこかの軍なんかが来るんじゃないかとはじめはやキモキしたもんだが、結局なにもなくてなあ」

「軍？」

「ああ、脱走兵とか、そうじゃなきゃあ、お国で変なことして、逃げなきゃならなくなった奴かと思ったんだよ」

だが、特にそういったことはなく。今ではひとりで山で暮らす妙な隣人ということで頼りにしているという。

ジンたちはもしも彼に会うことがあれば、と保存食と茶などの嗜好品^{しこう}が入った小ぶりの袋を渡される。必ずしも行きあうわけじゃないと断ろうとするが、男はぱちりとウインクし「その時はあんたが食べてくれていい」と笑った。その男の様子を見て、周囲の村人が苦笑いを浮かべている。

保存食はともかく、茶はそれなりに高価なも

のだ。しかも男はわざわざ高級な奴だと言ってきた。ぽんと赤の他人に渡してもいいものなのだろうか。ジンが困惑していると、レオンはなにを察したのか溜息を付き「受け取っておくといい」とジンに頷き、男の方を複雑そうに見た。

男は男でそんなレオンの目線など気にならないとでもいうように笑っている。ジンはよく分からないながらも袋を腰にくくりつけた。

「もしもまたこの村に来ることがあったら、オレの家に泊まってくれ」

男はそう言ってジンの肩を叩き、あっはっは、と笑って去っていった。

村人たちはいつものことだとでもいうように「あまり気にしなくていい」と訝^{いぶか}しがるジンに苦笑する。男の息子はその『先生』に命を救われたという。なるほどそれで高価なものと思うが、しかしそれは会えるかどうか分からないジンに渡さずに直接自分で持っていく方が良い気がする。

ジンがそうこぼすと、村人は、あのひとは足

が悪くてね、と口端を上げた。そして苦笑いし言葉を重ねる。

「それになあ、連れ合いを無くしてずいぶん経った」

そこまで言われてジンはやっと得心がいった。なるほど、自分は秋波を送られていたらしい。

「あなたは……」

レオンの呆れた視線が刺さる。「にぶい……」とぼそりと言われてしまった。

言い訳させてもらうのならば、そもそもジンには自分が恋愛対象として見られるという自覚が薄い。それは元々^{もともと}それらの感情が鈍いというものもあるだろうが、それ以上に自分のことで精一杯であることが大きい。ジン自身、自分のことを知らないのに、他人——それも会ったばかりの人間とのあれこれに気を使う余裕などなかった。

もしもその視線が悪意であつたら、それなりに気にしただろう。しかしそれが好意であつたのならば、感謝するだけだ。人付き合いとして同程度の好意は返すだろうが、慮外の——それ

こそ恋情を向けられても正直に言ってジンにはまだ受け止めきれない。

その後もいくらか噂^{うわさばなし}話を村人から聞いて回る。

『先生』についての話がそれなりに多かった。

曰く、いつもフードを目深にかぶっている。
曰く、背は高い。曰く、柔らかな落ち着いた物腰の壮年の男だ。

医者という立場なこともあり、無遠慮にフードの中を覗き込む者はいないようだが、子供や背が低い者にはいくらフードをかぶっていても顔が見える。その者たちが言うには、右目に眼帯をしているものの、見てくれは悪くないらしい。そのために一時は、どこかの貴族に見初められて逃げてきた麗人なのではなんて想像が働いたとか。しかし今では、それも下火らしい。彼がやってきてからもう片手で数えられないほど時がたつというのに、誰も彼を連れ戻しに来なかったからだろう。

多くの村人は『先生』を変人でありながらも——これはひとりで不便な山で暮らしているせ

いだ——、有益で無害な隣人として受け入れている。村人の話を聞く限り、山で暮らすほど偏屈な性格はしていなさそうだが。村人に聞くと「そうなんだがなあ」と逆に首をひねられる。ジンとしても気になりはするが、今回の山越えには関係はない。もしも行きあっても村の様子を伝え、託された土産を渡すくらいだろう。そう考えて心の隅に放り込んでしまった。

その他の有益な情報としては、今年の冬はかなり早いという。『先生』の噂より、この情報の方がずいぶんと重要だ。

冬が早いということは、早々に山越えをしたほうが良いということだ。雪が降り始めてしまっっては、荷物を抱えて山を登るのは格段に難しくなる。

その上、村人たちの話では今年は魔獣の出現も多いという。

「途中で雪に降られても困る。さっさと山を越えたほうがいい」

報告の最後でレオンがそう締めると、商人は

深く頷いた。

商人も商人で、今日の商いでそれなりの情報を集めたい。結局、当初の予定の通り明日出るのは同じだが、なるべく休憩を短くして最短で山を越えてしまおうということになった。

レオンと商人たちの話を聞きながら、ジンはちらりと空を見上げた。昼には晴れていたそこには薄い雲が敷かれ始め、陽の光を遮っている。

どうか平穏無事に山を越えられるようにと、ジンは密やかに願った。

転落

村を発って数日。ジンたちは山中にいた。

折り返し地点はすでに越えたが、山を完全に抜けるにはまだ数日はかかる。人だけならもっと早いのだろうが、彼らには荷がある。最短距離でひたすら高度を稼ぐのではなく、尾根の腹をなぞるように横へ横へと進んでいた。できることなら山裾を回るようにして平地を選びたかったが、こちらのほうが早いというのだから従うしかない。

村での、どうか着くまで天気が持ってほしいというジンの願いも虚しく、空は重い雲に押しつぶされそうだった。今にも泣き出しそうな灰色に、皆の足は自然と速くなる。無理はさせられない。しかし降り出す前に、馬車を落ち着か

せられる場所へ^{たど}辿り着きたかった。

雨雲が去るまでどこかに留まる案もあったが、それはそれで雪の心配が増す。村の者は言っていた——一度雪が降り出せば、積もるまで止まらないだろう、と。結局、この不安定な空の下を進むしかない。

馬のために休憩はこまめに挟んだ。それでも数日間ほとんど歩きづめで、人々の顔には^{ひとびと}疲労が濃く出ていた。だが足を止めて雪で立ち往生するのも困る。ジンたちは、ただ何事もなく山を越えられることを願うしかなかった。

そんな中で、ひとりだけやけに^{しゃべ}元気に喋っている者がいる。

「それでですね、その時、僕が——」

ジンの隣を歩くクリスだ。

荷車を引くのは馬だが、平地とは違い負担を減らすため、山に入ってから商人たちは護衛が使っていた馬に乗っていた。護衛は機動の都合でひとりだけが騎乗し、他は徒歩。そして馬の数も潤沢ではない。順番に乗る取り決めで、今はクリスが歩く番だった。

一緒に旅をしてよく分かった。この少年はとにかく喋る。生来のおしゃべり好きなのだろう。よくもそんなに話題が尽きないものだと驚くほど、ずっと言葉が続いていた。

普通なら、うるさいだの面倒だのと言われそうなものだ。だが不思議と不快にはならない。沈黙が長くなりがちな行軍の中で、少し疲れの^{にじ}滲む一行の空気を、クリスの明るい声がほどよくほぐしていく。

「あっ、あそこに花がありますよっ！」

クリスの指先の先に、白い^{かれん}可憐な花が咲いていた。崖際で木の少ない場所だ。少し距離があるのによく見つけたものだ——目がいいのだろう。

枯れた葉が黄ばんだ茶や薄い土色へと変わる中、その白だけがぽつりと浮いている。季節外れの開花なのか、たった一輪だけがまぼろしのようには開いていた。

主人に発見を自慢する子犬のように、クリスは目をきらきらさせる。ジンが笑って「綺麗^{きれい}だな」と^{うなず}頷くと、少年は頬を染め、さらに顔を明

るくした。彼の背後にぶんぶんと振られる尻尾が見えるようだった。

「摘んできますっ！」

嬉しさが^{うれ}あふれたように、言うなり、クリスはぱっと走り出した。

「おいっ」

馬上のレオンが止めようとするが、聞こえていないのか、クリスはそのまま飛び出していく。山道で集団から逸れるな、と口を酸っぱくして言い聞かされていたはずだ。だが花はそこまで離れていない。その程度ならば、と思ったのだろう。

追うべきか迷うレオンを、ジンが手で制した。

「いい。俺が行く」

道から外れてはいるが、目で追える距離だ。少し切り立った場所で危ないものの、クリスは足元も見ずに落ちるほど間抜けではない。皆に「すぐ追いつく」と声をかけ、ジンは小走りで少年の後を追った。

追いついた時、クリスはちょうど花を手折っ

たところだった。

「ジンさんっ」

少し走ったせいで頬を上気させたクリスが、花を差し出すように駆け寄ってくる。白い花を納めた手を前に突き出し、ぱたぱたと近づいてくる姿を微笑ましく見守ろうとして——その瞬間、ジンの表情が硬くなった。

地を蹴る。数歩の距離を一気に詰め、少年の薄い背をぐいと自分の後ろへ押しやった。

刹那、肩が^や灼けるように熱くなった。

次の瞬間には地面へ^{たた}叩きつけられる。近くでクリスの悲鳴が弾けた。だがそれに構っている余裕はない。

「っ、くそっ」

痛みに^{うめ}呻くジンの肩口へ、大きな^{おおかみ}狼^かが噛みついていた。

一回り小さな狼をレオンが狩っていたのを見たことがある。だがこれは違う。体毛が白い。きっと『魔獣化』——普通の狼が魔獣となったものだ。

体重をかけて地面に縫い留められ、起き上が

れない。動く片腕で腹を殴ってもびくともしなかった。牙がさらに食い込み、肉が裂ける。

なぜ、接近に気づけなかった？ ^{こしたんたん} 虎視眈々と獲物を狙っていたのか。群れからクリスが離れたのを見て飛び出したのか。

ジンは唇を噛みしめた。魔法の制御はそれなりにできるようになってきたが、暴発の可能性はまだある。だが今はそんなことに頓着してられない。正面に味方はいない。せいぜい ^{きぎ} 木々を ^{えぐ} 抉る程度で済むはずだ。

「——っ、水をっ！」

手元から勢いよく水球を放つ。しかし狼は俊敏に身を翻し、難なく避けた。肩から退いたのは ^{ぎょうこう} 僥倖だが、奴は五体満足のまま。

ジンは素早く立ち上がる。血が流れているせいか、 ^{めまい} 目眩がくらりと来た。それでも倒れるわけにはいかない。狼を ^{にら} 睨みつけて ^{けんせい} 牽制し、手を上げる。

「——もう一度……っ！」

^{つぶや} 呟いた途端、狼が飛びかかってきた。手の動きを ^{かわ} 読まれていたのだろう。紙一重で ^{かわ} 躲すと、

狼は障害などないと言わんばかりに地を強く蹴る。

「ジンさん——！」

クリスの絶叫が聞こえた。同時に、首筋へ牙が迫る。動脈を食い破られる寸前、ジンは狼の腹へ手を突き出した。

握っていたのは鋭く尖^{とが}ったナイフだ。拳が駄目でも、刃ならどうか。

刃は狼の腹を裂いた。狼はびくりと震え、着地したまま腹から血を流し、よたよたと数歩進んで崩れ落ちる。

ジンは肩を押さえながら近づき、万が一を潰すように首へ刃を走らせた。狼は最期に大きく震え、やがて動かなくなる。

ほっと息を吐くと、涙目のクリスが駆け寄ってきた。

「ジンさんっ！」

抱きつこうとするのを手で制す。傷は深い。それに、ジンは狼の血で汚れていた。

クリスがあわあわと手を上下させ、足踏みしているところへ、悲鳴を聞きつけたのだろうレ

オンが駆けつけてきた。ジンを見て、さっと顔色を変える。

「ジンッ！」

馬から素早く降りて駆け寄ろうとしたレオンが、近づく前に鋭く叫ぶ。

「後ろだっ！」

弾かれたように体をひねるのと、衝撃を感じるのは同時だった。ジンは再び地面へ叩きつけられ、崖の縁まで押し出される。衝撃で息が抜け、こほ、と咳き込んだ。肺が痛い。

ジンを地に縫い止めて睨みつけるのは、先程とは別の狼だった。先程のものは大の大人ほどもありそうな体躯だったが、これは一回り……いや二回りは小さい。

だが、数が違う。

彼らは二匹だった。

どちらも鼻面に皺を刻んで唸り、毛皮を逆立てている。憎しみの宿る瞳が、まっすぐジンを射抜いた。もしかしたら、あの狼の子供たちなのかもしれない。

力任せに振りほどこうとするが、小さな体の

どこにそれほどの力があるのか、がっちりと離さない。

弾みでナイフは手から飛んでいった。ならば魔法——そう思っても、二匹の牙を止めるために集中できない。

それに、正面にはクリスがいる。ここで暴発させれば、彼を巻き込む。

だがクリスは勇敢だった。いや、無謀でもあった。

拾った石を、狼へ投げつけたのだ。

「こっちだっ！」

石は一匹に当たる。狼は煩わしように身を振^{よじ}り、じろりとクリスを見た。

ジンの相手をもう一匹に任せ、標的を少年へ移した——それが分かる。

クリスは商人の息子だ。元気に振る舞っていても、特別体力があるわけではない。ひとえに彼の親が定期的に馬に乗せて休ませていたから、まだ威勢がいいだけだ。

狼に襲われたら、抵抗する間もなく終わってしまう。

視界の端に、剣を持って走ってくるレオンが見える。だがまだ遠い。間に合わない。

「待て——ッ！」

ジンは片手で一匹の攻撃をいなしながら、クリスへ向かおうとするもう一匹の足を無我夢中^{つか}で掴んだ。

ギャン、と狼が叫ぶ。^{にくにく}憎々しげにジンを睨み返した次の瞬間、狼は再び突撃してきた。

そして、それは思わぬ事態を引き起こす。

あ、と思った時には、ジンの身体は二匹の狼ごと宙に浮いていた。

あるはずの地面がない。確かにここは崖の縁だが、目測を誤ったわけではない。

地盤が——^{もろ}脆くなっていた。

そういえば村で、ゆるい場所があると聞いたような……。

ばきり、と無慈悲な音を立てて地面が割れた。身体は重力に従い、落ちていく。

時間がスローモーションのように間延びする。レオンが悲痛な顔で叫んでいるのが見えた。手が伸ばされる。

だが距離は遠い。

当然、届くことなく――。

ジンは、下へ下へと落ちていった。



(略)

医師の家

空は鈍色で、冷たく重い粒を際限なく降らせていた。男は合羽を被り、ぬかるんだ地面を踏みしめて歩く。長い髪は湿気を含んでわずかに重い。もうすぐ冬が来る。そのうえ山の冬は早い。明日には地面が凍っているかもしれない——そんなことを考えた。

その思考を遮るように、先行していた犬が吠^ほえた。

「はいはい、分かっているよ」

男は苦笑して「悪かったね」と呟^{つぶや}く。主人の意識が現実に戻ったのが分かったのか、犬はさきほどよりも早足で駆けた。男はそれについていく。片目しか見えないことが、こんな雨の日は常より煩わしい。男の右目は眼帯に覆われて

いた。

どうしてこうも苦労しながら飼い犬の後を追っているのか。男は短く息を吐いた。

すこし前。雨が降り出してしばらくして、番犬として放し飼いにしている犬が吠え^{ほえごえ}声を上げた。はじめは雨のせいかと思った。だが吠え声が止まない。次いで、犬を含め家畜を置いている小屋が壊れたのではないかと考えた。慌てて戸を開けたところ、濡れ^ぬ鼠^{ねずみ}になった犬が家の中へ飛び込んできたのだ。

普段なら、犬はそんな真似をしない。家の中には許可なく入らないよう、きちんと躡^{しつけ}をしてしている。それなのに犬は泥に汚れた足跡を床に付けながら、男の周りをぐるぐる回った。叱ろうとした男も、何かを訴えかけてくる犬の瞳に、言葉を飲み込んだ。

そうして男は今、犬に連れられて土砂降りの外にいる。

「おっと」

ちらちらと後ろを気にして、男がついてきていることを確認していた犬が、唐突に駆け出し

た。あっという間に姿が見えなくなる。だが、その先は川だ。まだ降り始めとはいえ、この調子なら水位はすぐに上がる。不用意に近づくほど愚かではないだろうが、動物というものは稀^{まれ}に驚くようなことをする。

転ばぬように、しかし出来る限りの速さで犬の後を追い、男はそこで目を見開いた。細長の目の奥から灰色の瞳が覗^{のぞ}く。

「なっ！」

川岸に、服を血で染めた人間が倒れていた。体の半分が水に沈んでいる。犬が懸命に服を咥^{くわ}え、川から引き上げようとしていた。男の姿に気づくと、懇願するように鳴き声を上げた。

男は素早くその人間の脇へ手を入れ、川から引き上げる。そして全身を手早く見分した。

血の赤は肩がとりわけ濃い。服をめくり上げると、何かの噛^かみ跡^{あと}があった。男が見ている間にも、傷口から血が流れ出している。

男は自分の着ている服を躊躇^{ちゅうちょ}なく裂き、傷口をきつく縛った。倒れ伏す者の顔色は白く、唇は青い。体もひどく冷たい。

簡単な処置を終えると、男はさっとその人を抱え上げた。犬が不安げにきゅうきゅう鳴く。男が歩き出すと、犬が先導を始めた。ずっしりと濡^ぬれて重い。だが男は、多少ふらつきながらも確かな足取りで歩みを進めた。

家に帰ってからは早かった。

ベッドに男を横たえると、まず傷口を見るために服へハサミを入れた。状態から見て一刻を争う。悠長に脱がせている暇はない。

見たところ一番大きな傷は肩だった。相当深く噛^かみつかれたらしく、肉もだいぶ抉^{えぐ}られている。動脈が傷ついていなかったのは幸いだが、治るまでにかなりの時間がかかりそうだった。

ほかにも手足に細かい傷があるが、肩ほどではない。加えて高所から落ちたらしく、体のあちこちに打ち付けた跡があった。

男は一通りの処置を終え、大きく息を吐いた。とりあえず、いま出来ることはやった。あとは彼の回復力に期待するしかない。

噛まれたあと、かなりの高所から落ちたうえ、

この大雨だ。犬が気づかなければ、そして男がもう少し遅れていたら終わっていただろう。そういう意味では運がいい。そしてその運がこれから続くことを願う。

握っていた器具から手を離すと、男の服だったものへ手をかけた。素早さを優先してハサミで切られ、もう服としての体裁は保っていない。水を含んで体温を奪う。着替えさせなければならなかった。

ふと、事務的に動いていた男の手が止まった。水で張り付いたシャツをまくり上げた時だった。「これは……」

思わず驚きの声が漏れる。細められていた目が丸くなる。胸の下に予想外のものを見つけたからだ。

それは花卉^{あざ}の痣だった。ひとつ、ふたつではない。複数ある。この痣の意味を、男は知っていた。

——^{イシュト・ラヴァル}《華冠持ち》。

男は呆然^{ぼうぜん}とそれを見つめた。しばし時間が止まったかのように感じた。がたり、と風に煽^{あお}られ

た窓が音を立て、肩が揺れて、正気へ引き戻される。

驚きだけが浮かんでいた瞳が、複雑な色を帯びた。驚き、戸惑い、怒り、憎しみ、そして微かな喜び。だが男は口元を^{ゆが}歪め、ゆるゆると首を振る。そして止めていた手の動きを再開させた。

——自分には、もはや意味がない。そう思った。



続きは商品版で！